

葛飾北斎と文人高井鴻山が描いた山水画

——中国の南宗画『芥子園画伝』との関わりを見る——

竹内 隆

はじめに

富士山が平成二十五年六月ユネスコの世界文化遺産に登録されたことで、小布施町の一般財団法人北斎館は「富嶽三十六景」の特別展を行った。富士山はそのみごとなコニー型の山頂に雲や雪を戴く景観だけでなく、日本人の富士山に対して抱く信仰に相当するような温かい心も認められたといえよう。葛飾北斎は「富嶽三十六景」に見られるように、浮世絵の制作において、これまで人物の背景として描かれた程度であった風景を、作品のテーマそのものとして取り上げた。この後、歌川広重をはじめ、風景画が浮世絵の新分野として広がりを見せていく。

高井鴻山記念館には六〇〇枚余の画稿（スケッチ）が収蔵されている。この画稿は高井鴻山によるとも、葛飾北斎が鴻山の描画学習用に手本として描いたともいわれる。しかし画稿に遺された字体には違いが推測され、全て同一人が描いたとも考えられないという。とまれ鴻山あるいは北斎が描いたものかは別として、絵を描こうとする人にとっては、手本にもなつたものと考えられる。

描画を始めるときに、師匠について絵を習うだけでなく、自ら学べるような手本があれば、自ら学習して向上することができると思う。そうした

絵画（東洋画）入門の手本出版の要望にも応えたものが、当時の中国（清朝初期）で編集・出版され、中国と日本両国で人気を博した『芥子園画傳』である。この『画伝』は初集・二集・三集・四集とあり、出版後間も

れて間もなく日本に移入されたのである。

日本で初めて中国文人画に関心を示して取り組んだのは、漢詩文にすぐれ中国文化にあこがれをもつ儒者や、学問教養を積んだ武士・町人であった。日本では南（宗）画といい、江戸時代の中・後期に発展し、高井鴻山も南画を描いている。この時代はまた西洋の絵画が国内に流入することによって、平賀源内や司馬江漢、渡辺崋山など、西洋画の影響を受けた画法（洋画）が展開する。本稿では風景画と文人画を主とし、その発展について葛飾北斎や高井鴻山と関連付けながら考察をすすめてみたい。

高井鴻山記念館には六〇〇枚余の画稿（スケッチ）が収蔵されている。この画稿は高井鴻山によるとも、葛飾北斎が鴻山の描画学習用に手本として描いたともいわれる。しかし画稿に遺された字体には違いが推測され、全て同一人が描いたとも考えられないという。とまれ鴻山あるいは北斎が描いたものかは別として、絵を描こうとする人にとっては、手本にもなつたものと考えられる。

描画を始めるときに、師匠について絵を習うだけでなく、自ら学べるような手本があれば、自ら学習して向上することができると思う。そうした

なく鎖国策をとつていた日本に移入されて日本の南画発展の土台となり、また再版も行われて広く活用された。鴻山や北斎も見たと推測されるこの『画伝』の内容とその影響、『画伝』と北斎、鴻山との関わりなどについて考察してみたい。

一 日本でも広く普及した南画の手本

『芥子園画伝』

(一) 高井鴻山の京都遊学

江戸時代になつて狩野派は幕府の御用絵師として、あるいは各藩の大名家で絵師を務め、師弟の系列を構成して大きな勢力を持ち、独自の伝統的な画風を構成していた。しかしそのような組織に属さない人や地方で新たに絵画を学ぶ者にとつては、自分が目指そうとする師に弟子入りするか、あるいは師の作品を模写することによって、技法や作品に込められたものを学びとつていつたものと思われる。

当時名画に直接触れあうことはほとんど考えられないが、葛飾北斎は自身の作品に対する評価が高まり、北斎の画を学ぼうとする人たちが次第に大勢となつていったことを背景に、文政十一年（一八一四）の初版から『北斎漫画』を次々と発表し、弟子たちに描画の絵手本を示したといわれる。こうした描画の本格的な手本となる画譜で、中国からもたらされ活用されたものに、『芥子園画伝』や『八種画譜』がある。後者は八種類の画譜（絵画や画論集）を集成したもので、画論とともに図様が示され、文人画を学ぶ絵手本として活用された。またその絵は有名作家の原画に倣つて人物画・花鳥画・山水画などが示される。

高井鴻山（三九郎）（文化三～明治十六、一八〇六～一八八二）は十五歳の

文政三年（一八二〇）、祖父作左衛門（長救）の熱い期待を受けて京都への遊学に向けて小布施を後にした。鴻山は摩島松南からは儒学だけでなく文章と詩を学び、書の師である貫名海屋からは漢詩を、国学と和歌は城戸千楯に、画の技法は虎の絵で有名な岸駒とその子である岸岱に、また浮世絵は横山（三畠）上龍に、さらに漢詩文は梁川星巖を追つて江戸でも学び、文人としての実力を付けていった。

豪農商である高井家の後継者である鴻山に、祖父や父親（熊太郎）はなぜ実学でなく、このような多分野にわたる学問・教養を長期にわたって学ばせたのか。それは学問研究で江戸に対しても一方の中心である京都で、先進的な学問・教養を身につけさせ、その成果を信州小布施村に持ち帰り、村の文化活動をさらに興隆することにあつたのではないか。当時小布施村では豪農商を中心とする文化人・知識人が、儒学や国学・漢詩・絵画など、活気ある文化活動を展開していた。その中に鴻山を置いて一層の文化活動の興隆を考えたのではないか。鴻山に学ばせるとして選んだテーマは、当時盛んであった文人としての有り様を示すものであると思われる。なお地域の文人間での交流だけでなく、江戸に出て師に学び、帰省して村の文化活動（漢詩文）に貢献した人物に、市村適斎（高井家の分家、通称「下屋敷」の当主）がいる。

(二) 絵画を学ぶための手本の作成

絵画を学ぶとき、師匠に個人的につくか、私塾あるいは藩校で学ぶことになると思われるが、鴻山のように数人の師から直接に指導を受けることができる者は、幸運でありまた例外であろう。別の方針とすれば手本である粉本（手本）を手に入れ、習得していくことになる。

江戸時代の初め、絵画（東洋美術、水墨画や淡彩画）の描き方や理論を総合的に解説した画譜として中国から日本に持ち込まれ、たいへん便利なもの